

大学生用適応感尺度の作成の試み —— 個人—環境の適合性の視点から

Development of a subjective adjustment scale for university students according to the person-environment fit model

大久保 智生

早稲田大学大学院人間科学研究科

青 柳 肇

早稲田大学人間科学部

問 題

適応とは「個人と環境の関係」を示す概念であり(福島, 1989; 近藤, 1994), 「個人と環境の調和」として定義される。これに対し, 適応感とは, 適応そのものを意味する概念ではないが, 個人の適応の1指標としてとらえられるものであり, 適応感を規定するものは個人と環境との主観的な関係と考えられている(谷井・上地, 1994)。

従来の適応感研究では, 主に対人関係や学業といった研究者側が設定した要因の集合として適応感の測定は行われてきた。しかし, これまで行われてきた適応感の測定は大学生活への主観的な意味づけを考慮しているとは言いがたい。特に大学生について考えると, 近年の大学進学率の増加に伴い, 多様な価値観をもつ学生が大学に集まってきており, 彼らは大学生活に対して多様な意味づけを行っていると考えられる。こうした現状を考慮すると, これまでの適応感尺度で測定されている学業などに価値を置かない学生も数多く存在すると考えられるため, 大学生活に対する様々な主観的な意味づけを考慮し, 大学環境へのより主観的な適応の感覚を測定する尺度が必要であると考えられる。すなわち, 大学生が大学環境に対してどのような認知をしているかや感情を抱いているかを測定する尺度の開発が必要といえる。

先行研究において, 適応, すなわち個人と環境の関係は, 個人と環境の適合の良さ(Lerner, 1983), マッチング(近藤, 1994), 一致(戸川, 1956)といった個人—環境の適合性の視点から考えられている(大久保, 2002)。個人—環境の適合性の視点から適応感をとらえると, 適応感とは「個人が環境と適合(フィット)していると意識すること」と定義できる。このような個人と環境の適合性の感覚は, 当該の環境を自分と合った場所, すなわち小沢(2000)の述べる適所(居場所)であると感じることと同義である。

そこで, 本研究では, 個人が環境と適合している時の認知や感情を測定する新しい適応感尺度を作成し, それを大学環境に適用させ, その信頼性・妥当性を検討することを目的とする。なお, 併存的妥当性としては, 対人関係や学業などの要因の集合としてとらえる従来の適応感尺度ではなく, 大学環境への認知や感情を測定していると考えられる適応感尺度(二宮, 1994)との関連を検討する。また, 構成概念妥当性として, 抑うつ尺度との関連を検討する。抑うつは, 広く精神的健康の指標として用いられており, 適応感との関連があると考えられる。

方 法

適応感尺度の項目作成

男女大学生112名(男子55名, 女子57名)から, 「居場所があると感じるとき」「居場所がないと感じるとき」の自由記述を収集した。大学生にとって, 適応はなじみのない言葉であり, 個人が環境と適合している時の認知や感情を測定する尺度を作成する本研究の目的から, 「適応していると感じるとき」ではなく, 「居場所があると感じるとき」「居場所がないと感じるとき」を教示文として用いた。

これらのデータを心理学専攻の大学院生5名が検討し, 適応感尺度44項目を作成した。作成された適応感尺度44項目を大学環境に適用させ, 大学環境への適応感を測定する尺度として用いた。回答形式は「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」までの5件法であった。

調査協力者と質問紙の構成

首都圏の私立大学に通う大学生418名(男性234名, 女性184名)に対して質問紙調査を実施した。妥当性の検討を行うための尺度として, 以下の2つの尺度も同時に実施した。①学校適応—脱学校尺度: 二宮(1994)の学校に対する意識尺度のうち「学校適応—脱学校」因子の項目を用いた。②抑うつ尺度: SDSの日本語版(福田・小林, 1973)を用いた。

結果と考察

大学環境への適応感尺度44項目に対して, 因子分析(主因子法, プロマックス回転)を行った(Table 1)。因子負荷量の絶対値0.4以上を示した項目を参考に4因子29項目が妥当であると考えられた。第1因子は, 「周囲に溶け込めている」や「周りの人と楽しい時間を共有している」など, 気楽な居心地の良さを表す項目からなっているので, 「居心地の良さの感覚」因子と解釈した。第2因子は, 「他人から頼られていると感じる」や「必要とされていると感じる」など, 他者からの信頼感や受容感を表す項目からなっているので, 「被信頼・受容感」因子と解釈した。第3因子は, 「熱中できるものがある」や「好きなことができる」など, 課題や目的のあることから生じる満足感を表す項目からなっているので, 「課題・目的的存在」因子と解釈した。第4因子は, 「その状況で嫌われていると感じる(逆転項目)」や「無視されていると感じる(逆転項目)」など, 他者からの拒絶感や疎外感を表す項目からなっているので, 「拒絶感の無さ」因子と解釈した。以後, これら4因子29項目を大学環境への適応感尺度とする。

Table 1 大学環境への適応感尺度因子分析結果

(項目)	第1 因子	第2 因子	第3 因子	第4 因子
第1因子 居心地の良さの感覚 ($\alpha = .895$)				
周囲に溶け込めている	.849	.038	-.106	-.104
周りの人と楽しい時間を共有している	.800	-.015	-.089	-.048
自由に話せる雰囲気である	.710	.004	.004	-.010
周りに共感できる	.692	.118	-.054	.151
周りの人と類似している	.604	.021	-.232	.228
*孤立している	-.575	.009	.126	.336
周りから理解されている	.470	.379	-.029	.032
受け入れられていると感じる	.438	.238	.087	-.086
リラックスできる	.426	.111	.222	-.031
ありのままの自分を出せている	.411	.067	.193	-.046
第2因子 被信頼・受容感 ($\alpha = .858$)				
他人から頼られていると感じる	-.067	.846	-.063	-.039
必要とされていると感じる	.012	.836	-.062	-.042
他人から関心をもたれている	.172	.577	.083	.068
一定の役割がある	.143	.496	.148	.103
良い評価がされていると感じる	.115	.493	.135	-.009
存在を認められている	.202	.413	.067	-.142
第3因子 課題・目的的存在 ($\alpha = .828$)				
熱中できるものがある	-.215	.091	.808	.110
好きなことができる	.027	.057	.730	.090
満足している	.326	-.178	.676	.071
*退屈である	-.104	-.020	-.647	-.019
やるべき目的がある	-.322	.126	.624	.074
自分のペースでいられる	-.112	-.048	.521	-.244
*寂しさを感じる	-.143	.129	-.476	.151
第4因子 拒絶感の無さ ($\alpha = .760$)				
*その状況で嫌われていると感じる	.157	-.001	.094	.802
*無視されていると感じる	-.014	.002	.094	.697
*疎外されていると感じる	-.129	.044	-.076	.670
*自分が場違いだと感じる	.070	-.071	-.069	.523
*浮いている	-.170	-.076	.030	.508
*他人から干渉されているように感じる	.347	.034	-.192	.462
因子間相関				
第1因子	.721			
第2因子	.626	.548		
第3因子	.593	.385	.488	

(注) *がついている項目は、各尺度における逆転項目を示す。

尺度の信頼性を検討するため、クロンバックの α 係数を算出したところ、第1因子は.895、第2因子は.858、第3因子は.828、第4因子は.760であった。よって、内的整合性の観点からの信頼性は十分であることが示された。次に、尺度の妥当性を検討するため、大学環境への適応感尺度と学校適応—脱学校尺度および抑うつ尺度との相関係数を算出した。

その結果、学校適応—脱学校尺度との関連では、得られた相関係数はすべて有意な正の値を示し、 $r = .410 \sim .701$ の範囲であった。抑うつ尺度との関連では、得られた相関係数はすべて有意な負の値を示し、 $r = -.385 \sim -.517$ の範囲であった。

本研究では、従来の大学生用の適応感尺度とは異なる、環境と適合している時に生じる認知や感情に焦点を当てた尺度を作成した。作成された尺度は、十分な信頼性と妥当性を有していると考えられた。抽出された因子を考察すると、大学環境と適合しているときは、大学環境に対して好ましい認知や感情を抱きやすく、様々なことに対して動機づけの高まる状態になると考えられる。したがって、快適さや居心地の良さを表す因子と課題や目的的存在による充実感を表す因子が抽出されたことは妥当であると考えられる。また、周囲からの信頼や受容されている感覚と拒絶されていない感覚を表す因子が別々に抽出されたことは、従来の対人関係因子とは異なったものである。このことは単なる他者との親和関係ではなく、当該の環境において他者との関係をどのようにとらえているかが適応感を構成する要因であると考えられる。

個人が適応に成功するかどうかは、実際にその環境に入っていない限りわからないものであるが、ある環境においてある特徴をもつ個人が適応しやすいかどうかは予測することは可能であろう(戸川, 1956)。したがって、今後の課題としては、個人—環境の適合性の視点から、どのような特徴をもつ個人がどのような特徴をもつ環境と出会った時に適応感が高くなるのかについて実証研究を行うことが必要であるといえる。

引用文献

- 福田一彦・小林重雄 1973 自己評価式抑うつ性尺度の研究 精神神経学雑誌, 75, 673-679.
- 福島章 1989 性格と適応 本明 寛・依田 明・福島章・安香 宏・原野広太郎・星野 命(編) 性格心理学講座3: 適応と不適応 金子書房 Pp.3-37.
- 近藤邦夫 1994 生徒と教師の関係づくり——学校の臨床心理学 東京大学出版会
- Lerner, R. M. 1983 A "goodness of fit" model of person-context interaction. In D. Magnusson & V. Allen (Eds.), *Human development: An interactional perspective*. New York: Academic Press. Pp.279-294.
- 二宮克美 1994 大学生の大学生活への適応と社会意識——質問紙調査結果の基礎的分析 愛知学院大学教養部紀要, 41, 77-112.
- 大久保智生 2002 青年期における個人—環境の適合の良さ・マッチングの検討——動機づけを中心に ソーシャルモチベーション研究(日本発達心理学会 Social Motivation 研究分科会), 1, 51-61.
- 小沢一仁 2000 自己理解・アイデンティティ・居場所 東京工芸大学工学部紀要, 23, 94-106.
- 谷井淳一・上地安昭 1994 高校生の学校適応感と彼らの親の自己評定に基づく親役割行動の関係 教育心理学研究, 42, 185-192.
- 戸川行男 1956 適応と欲求 金子書房
- 2003. 4. 7 受稿 2003. 9. 24 受理—